未来バンク

すべての人がおカネに意志を持たせる社会にする

ニュースレター 第6号 2021 JUN

【コンテンツ】

1.田中優　2.木村瑞穂の金融コラム　3.奈良由貴

4.融資先の活動紹介　「雑貨屋次郎」白岩佳子さん、次郎さん

田中 優 理事長

Tanaka Yū

「グリッドの革命」を

「雨にも負けず」宮澤賢治（現代語訳）

雨にも負けず
風にも負けず
雪にも夏の暑さにも負けぬ
丈夫な体をもち
欲は無く
決して怒らず
いつも静かに笑っている

なんだか今の私の暮らしみたいだ。違うと思うのは、「よく見聞きしわかりそして忘れず」のところの「忘れず」に自信がない。年取ったと思うのが「たくさんのカタカナ言葉」を覚えきれないことだ。

だけど「普遍的に暮らしている」ことには自信がある。何か外に頼って暮らしてはいない。水も電気も暖房も、外に頼っているのはわずかなガスと町内から得られる食料か。もちろん子どものおやつなど、すべてを町内に頼っているわけではないが。

つい先日、我が家にやっと太陽光発電パネルとリーフの中古バッテリーを増設した。

これまでも送電線を切り、慧通信技術工業の「パーソナルエナジーと太陽光発電パネル」で電気を自給して、オフグリッド生活をしてきたが、いかんせん雨の多い梅雨や秋雨の時期にはどうしても電気が足りず、ノマドに出たり近所の温泉ホテルのお世話になることもあった。

ところが増設してこれで、長雨が続いても電気は十分になり、「どんな時でも普通に暮らせる」生活が実現した。それはそれで少し寂しくもあるのだが、「ノマドに行きたければ出掛ければいいじゃない」と「自エネ組」の大塚尚幹さんに言われ、そういえばそうだなと思い直した。

それというのも、価格が急激に安くなったのだ。太陽光発電パネルは性能が上がって安くなり、「中古バッテリー」も市場に出回るようになって安くなった。「送電線網(グリッド)」を増やすより、はるかにロスが少なくて安い。もう中央集権のグリッドにぶら下がるより、家庭は独立した方が安心で安くなる。

これは「自エネ組」メンバーにつけてもらった。「自エネ組」とは「自給エネルギーチーム、自エネ組」で、自然エネルギーの略ではなくて「自給の自」だ。だから「電線につないで電力会社に電気を売って」などとは考えない。お金目当てではないのだ。

この効率が気にかかるところだが、バッテリーの「自然放電」によるロスは一ヵ月に5%以下でとても少ない。それまでは「鉛バッテリー」をつないでいたが、「リーフの中古リチウムイオンバッテリー」に変えると、電気の入り方が大きく変わった。それまでと比べると体感的には倍の量が充電される感じだ。今まで入りにくかった電気が、すっと貯められていく感じだ。

今の電力会社から届く電気のロスがどれほどかを知っているだろうか。「オフグリッド」という言葉を作り出した「慧通信技術工業」の栗田さんの示した図はこうである。

なんと63%の電気が発電時と送電時にロスされているのだ。たった37%しか家庭に届いてきていないのだ。それに対して今のリチウムイオンバッテリーのロス(「自己放電率」という)はどれほどだろうか。なんと一ヵ月に5%以下に過ぎないのだ。通常の電気は作られてすぐに63%ロスするのだから、勝負にならないほど電力会社のグリッドは効率が悪いのだ。それなら、グリッドに頼る必要はないでしょう。

日本一の二酸化炭素排出源は「発電所」で、化石エネルギーから電気に変える「エネルギー転換部門」が最も多くの二酸化炭素を排出している。末端の「家庭」は、電気消費量が小さい上に「送電ロス」の多すぎる「配電線」でつながれている。その同じ配電線から太陽光発電の電気を送電して、またロスして届けてもらうのは往復の無駄だ。

それよりは「地域」に電気を蓄えて、地域で電気の自給をした方が良い。いろいろ理由をつけて「めちゃ高い電気料金」を払わせられるのは、愚かではないか。

それを人々が買い支えなくなったら、原発も電力会社ももたなくなる。逆に言うとそれらを支えてたのは、中央集権の電気の仕組みと一般家庭からの電気料金だったんだ。

しかしついに電気は電線より「自立・独立」が有利な時代になった。次はこの合理的な仕組みをどう地域に広げていくかだと思う。

木村瑞穂

Kimura Mizuho

「銀行が自動販売機になる日」

■プログラム可能な通貨

第二次仮想通貨バブルが到来している。仮想過通貨のことを何も知らず、儲かりそうだというだけで投資している人も多いのではないだろうか。このニュースレターが届く頃にはもうバブルが弾けているかもしれないが。

仮想通貨には大きく２つのタイプがある。１つはビットコインを代表とする価値を蓄積するための通貨で、もう１つはイーサを代表とするプログラム可能な通貨である。

■銀行という自動販売機

プログラム可能な通貨といっても何のことかわからないだろう。

銀行という名前の自動販売機を考えてみてほしい。お金を預けることもできるし、預けたお金を担保にして他の種類の通貨を借りることもできる。最近では不動産を小口化した仮想通貨も登場しているので、そういったものを担保にしてお金を借りることもできる。

普通の銀行と違うのは、銀行員がいないことと、自動販売機を動かすためにはユーザーが仮想通貨を入れないといけないという点だ。自動販売機によって使える仮想通貨が異なるが、自動販売機の利用料は平均して数十円程度である。安いものであれば、１円以下で自動販売機を利用することができる。

■目に見えて利息がついていく

例えば、100万円を自動販売機に預けてから、数十円程度の仮想通貨を入金し、「預ける」と書かれたボタンを押す。そうすると自動販売機に残高が表示され、利息も表示される。預けた直後から利息は増え始める。数字がカウントアップしていく。これはちょっとした感動だ。最近では利息なんて見たことがないから。

■融資の利息収入は預金者にも機械的に配分される

自動販売機でお金を借りることもできる。担保を預けてから融資の希望額を入力する。数十円程度の仮想通貨を入金してから「借りる」というボタンを押すとお金が出てくる。この間約10秒。不毛な書類を大量に提出する必要もない。

この自動販売機の素晴らしい点は、融資の利息収入がほぼ全額預金者に配分されることだ。銀行員はいないし、自動販売機を動かす費用もユーザーが負担している。自動販売機を製造するコストが掛かっているため、自動販売機の開発者にも一部配分されるが、その率は小さい。

自動販売機の優れた点は、その配分比率が公開されていることだ。自動販売機の説明書を読むと、利息収入の配分比率が記載されている。

■仮想通貨で進む金融革命

仮想通貨というと「儲かる」「危ない」「怪しい」というイメージが強いが、こうした金融革命が静かに進んでいる。

米国のワイオミング州ではこの自動販売機に法人格を認める法律が成立した。

余分な銀行員や立派な店舗がない分だけコストは安い。預金金利は高くなるし、融資金利も低くなる。現時点では使い勝手は良くないが、いずれ改善されるだろう。銀行が自動販売機になる日がやってくる。これはＳＦの話ではない。

この自動販売機にはもう一つ大きな秘密がある。説明を始めると長くなるので、次回のお楽しみとしてとっておこう。

奈良由貴

Nara Yuki

コミュニズムか野蛮か！ 斎藤幸平著『人新世の資本論』

■人新世の資本論

この新書本は20万部を越えるベストセラーであり、すでに読まれた方もたくさんいると思います。マルクスの「資本論」ですが、正直に告白いたします。私は読んでいません。そんな私は、今年の1月にEテレ「100分de名著」でマルクスの「資本論」を取り上げた番組を観ました。そして指南役として登場した斎藤幸平さんを初めて知りました。

マルクスはもとより、資本主義についてわかりやすく説明をしている斎藤氏の話がすこぶる面白く、すぐに近所の本屋を巡って『人新世の資本論』を探しましたが、残念ながらどこの本屋にも無く、ネット注文で手に入れたのでした。その後2月にこの本は「新書大賞２０２１」を受賞します。以降はどこの本屋さんでも目立つところに置かれ、今でもコンスタントに注文を受けているようです。

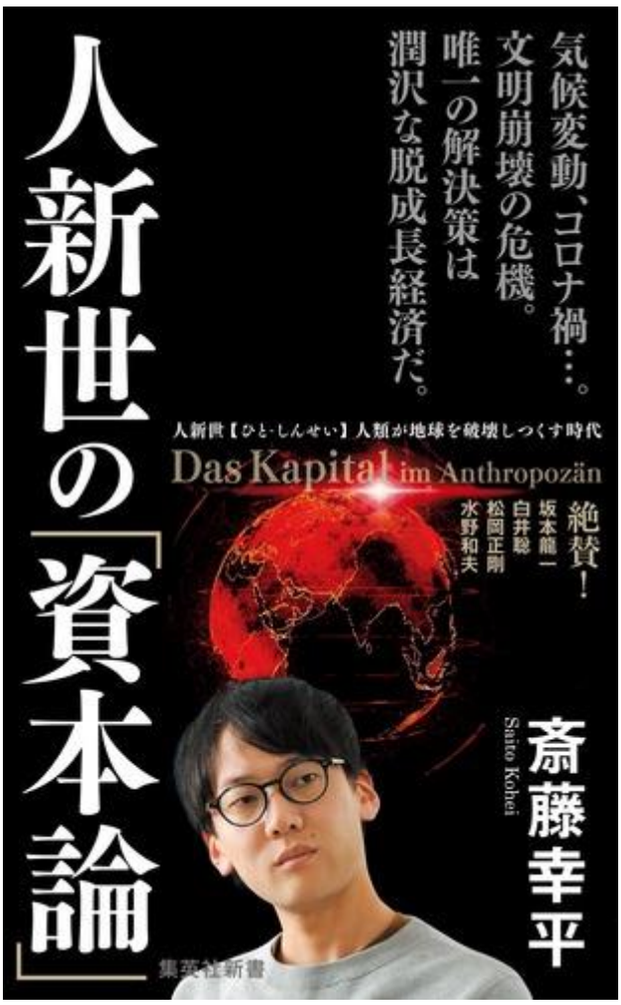
■脱成長

「はじめに」の文章で、今や猫も杓子も状態の「SDG's」を一刀両断しています。「成長を止めない行動指針は企業や政府のアリバイ作りのようなものです」と書く。同じ理論でグリーン・ニューディールもバッサリ。著者の文体はリズミックで読みやすく一気に読みました。

利潤の追求で資本を独占してきた近代資本主義が自然環境を破壊し続けている。資本主義経済と持続可能性は両立しない。この仕組みを続ける限り気候危機は乗り越えられない。脱成長コミュニズムへの転換で持続可能な社会を構築しよう、というのが本書の内容です。

名だたる経済学者、哲学者、歴史家などの文献を引用しながら資本主義のヤバさを徹底解説。

後半はマルクスの晩年の思想を紹介しながら、気候危機への回避は「脱成長コミュニズム」への転換による本来の持続可能な社会を構築するしかない、と提唱しています。日本にはあまり伝わってこない、グローバル・サウスでの農民運動や、ヨーロッパの自治体におけるミュニシパリズム（※）など、世界の社会運動とその連帯を紹介しながら、「脱成長コミュニズム」への道筋を示してくれています。



人新世の「資本論」– 集英社新書 (shueisha.co.jp)

【著者略歴】
斎藤幸平（さいとう こうへい）
1987年生まれ。大阪市立大学大学院経済学研究科准教授。ベルリン・フンボルト大学哲学科博士課程修了。博士(哲学)。専門は経済思想、社会思想。
Karl Marx's Ecosocialism:Capital,Nature,and the Unfinished Critique of Political Economyによって権威ある「ドイッチャー記念賞」を日本人初歴代最年少で受賞。編著に『未来への大分岐』など。

■経験を通して

ろくな勉強もせずにおとなになった私は、幸いなことに親になってから「生活クラブ生活協同組合」と出会い、生協が社会運動だということを知りました。近代農業の課題、食品添加物の問題、合成せっけんの危険性などを社会経済や流通の仕組みと共に学ぶことになります。

東京都に「食品安全条例」の制定を求めた直接請求運動（1990年）に参加したことをきっかけに「区議会議員」という職業も経験し、その後も多国籍企業のアグリビジネスが、どれほど悪辣な環境破壊と人権侵害を起こしているのかを学んできました。

江戸川区に「熱帯木材不使用条例」の制定を求める運動を起こし、その勉強会（理事長の田中優氏も主要メンバーでした）をきっかけにマレーシア、サラワクへのスタディツアーに参加。現地で、熱帯木材の伐採どころか熱帯林が皆伐されて広大なオイルパームのプランテーションになっている実態と、先住民の方々が守ってきた持続可能なコモンが暴力的に壊されていく様を目の当たりにしました。

30年近く経った現在、オイルパームプランテーションの問題はより複雑に大規模になり、解決どころか深刻な環境破壊と人権問題を継続しています。消費行動くらいしかできない自分の無力を感じていました。

■キーワードは「コモン」

これまでも、多くの論客が「脱成長」を唱えてはいます。しかし、著者の斎藤氏は旧世代が提唱している「脱成長型資本主義」は実現不可能な空想主義だと言い切っています。中途半端な解決策では気候危機などの問題を先延ばしにするだけで、もうはやその時間的な余裕はなく「新世代の脱成長論は、もっとラディカルな資本主義批判を摂取する必要がある。」と書いています。そして、このまま気候変動が進めば、環境難民が増え食糧危機が到来し、苦しむ大衆が暴動を起こして「野蛮状態」に陥ると予測しています。

では、資本主義を相手にどのように行動すればよいのでしょうか。そのキーワードが「コモン」だというのです。資本主義が解体してしまった「コモン」を市民の手に取り戻し、水も土地も電気も労働も共有の資源として公平に使い、共同・協働での持続社会をめざすべきとマルクスの晩年のノートを示しながら述べています。生活協同組合、労働協同組合、共済組合などの協同事業を拡げ、おまかせ政治ではなく参加型民主主義で「脱成長コミュニズム」に着地しようと提唱しているのです。

私は、もはや「人新世」はサバイバルの時代だと思っています。でも野蛮な未来はなんとしても避けたいのです。資本主義にどっぷりはまった社会で、その仕組みそのものを一気に変換していくことは難しいでしょう。

では、どうあがいていきましょうか。資本主義の内部で部分的な変換であるなら、気づいた人々と共にやっていけそうです。内側から「コモン」を増殖して、水、食料、エネルギーなどの自給を広げ、じわじわと「資本主義」を分解していくことができるのなら、サバイバルも「どんと来いや！」と楽天空想主義者の私は思うのです。何よりも、この著書が多くの人に読まれていることに力をもらいました。

著者の斎藤幸平さんは、今やあちこちのメディアに出没している人気者です。検索すると対談などをレポートしたサイトがたくさんヒットしますし、動画でのリアルトークもとても魅力的ですので、ぜひ聴いてみてください。

※ミュニシパリズム
政治参加を選挙による間接民主主義に限定せず、地域に根付いた自治的な民主主義や合意形成を重視するという考え方。

融資先の活動紹介

白岩佳子さん、次郎さん

▷ 雑貨屋次郎（2020年12月に商品仕入れ資金を融資）

■雑貨屋次郎

未来バンクの出資者の皆さま、こんにちは。

「雑貨屋次郎」は、現在26歳でIQ18の次郎さんが店長を務めるさすらいの雑貨屋です。

次郎さんが高等部卒業とともに、「雑貨屋次郎」と屋号を名乗り、イベントや、講演会、映画会で出店し始めました。

１区画２メートルほどのスペースですが、知的障がいのある次郎さんの居場所を作り、イベントや催しに来ている人と触れ合う機会を作ってきました。

次郎さんの仕事は、出店して物を売るだけにとどまらず、「障がい者は不幸」「障がいがあることは可哀そう」という偏見を覆すことでした。

なにしろ、次郎さんは楽しそうで、いつも幸せそうです。その姿を通して、差別と偏見のない社会を作ることに貢献してきました。

「雑貨屋次郎」の取り扱い商品は、次郎さんの出会いと助け合いが具現化したものです。

例えば、東日本大震災後に出会った南相馬ファクトリーの缶バッチがそうです。次郎さんは南相馬ファクトリーの会報の表紙を飾ったこともありました。

その他には、パレスチナオリーブオイル、パレスチナオリーブ石鹸、ケニアのスラムの子どもたち応援グッズなど。最近では、次郎さんオリジナルデザインTシャツや、手ぬぐいも人気です。

お知らせ

2019 / 02 / 09

NEARLY届きましたか？

南相馬ファクトリーの会報誌『NEARLY』なかま会員のみなさまのお手元に届きましたでしょうか？

■コロナ禍を乗り越えて

コロナ禍は、母親と２人暮らしの次郎さんの日常にも大きな影響を与えています。福祉サービスが充分に受けられなくなったのです。

人が大好きで、人と触れ合うことを喜びとしていた次郎さんには、とても辛い日々でした。「マスクをしろ」おじさんが現れたことも大きな恐怖でした。

母親と一緒の時には、そんなことを言う人はいないのに、ひとりで出かけている時に怒られるのです。ひとりでの外出が怖くなりました。

それでも、ネットで「雑貨屋次郎」に注文が来ることは大きな喜びで、郵便局に届けるのは次郎さんの仕事です。言葉がなく、人と繋がるツールの乏しい次郎さんには、なによりも嬉しいことです。

以下のウェブサイトで「雑貨屋次郎」の活動や取扱商品を掲載しています。皆さんに見ていただけると嬉しいです。次郎さんと「雑貨屋次郎」を、今後ともよろしくお願いいたします。

次郎さんが描いたメモを使ったアール・ブリュットの作品を色々なグッズにして販売しています。ぜひ次郎さんの世界に触れてみてください。

※アール・ブリュットとは、フランス語で「生の芸術」の意味。障がい者アートを指すことが多いが、障がいの有無に関係なく伝統や流行・教育などに左右されず、自身の内側からわきあがる衝動のままに表現した芸術を示す。

＜取材希望者募集！＞

ニュースレターで取り上げてほしい活動などあれば、未来バンク事務局宛にご連絡ください。順次、お伺いいたします。

◎FaceBook
みんなしあわせ
雑貨屋次郎

◎しらいわよしこさん
のnoteブログ

◎ご友人の
ネットショップ
はろの屋

未来バンクとは

市民が組合員となって出資していただいた資金を、環境・市民事業・福祉の目的に関して、市民やNPO団体・法人が起こす社会的有用性の高い事業や取り組みに対し「融資」という方法で支援することを目的に設立された、市民による市民のための非営利バンクです。
出資者のみなさまの夢のこもったお金を通じて、想いと人をつなぎ、住みよい未来を育てていきます。

融資実績

融資累計件数：438件　融資累計額：約14億38百万円（2021年6月時点）

2020年12月～6月　融資件数：2件　融資計額：1,009万円

融資の申し込みをご検討の方は、ウェブサイト内の「融資を受ける」をご覧ください。お問い合わせをお待ちしています。
https://mirai-bank.org/loan/

未来バンクの趣旨にご賛同いただける方は、出資をご検討ください。
詳細はウェブサイト内の「出資・応援する」をご覧ください。
https://mirai-bank.org/investment/

未来バンクニュースレター　第６号
発行・編集：未来バンク事務局
発行日：2021年6月

未来バンク
MIRAI BANK

連絡先：〒132-0033
東京都江戸川区東小松川3-35-13-204
市民共同事務所「市民ファーム」内
TEL/ FAX：03-3654-9188
HP：https://mirai-bank.org/
MAIL：info@mirai-bank.org